

赤色立体地図から見た横沢入

内山 孝男

はじめに

あきる野市横沢の横沢入は、JR五日市線の北側の、武蔵増戸駅と武蔵五日市駅のほぼ中間に位置する、標高三〇〇メートル内外の丘陵（五日市丘陵）に囲まれた谷戸である（写真1）。北西に分水嶺があり、東南に開口する。主稜線の内側は約六五センチの広さがあるが、うち約四八・五センチが、二〇〇六（平成一八）年一月に、東京都の「里山保全地域」に指定された。域内に住宅などの排水を流す施設が無いため良好な自然環境が残されており、東京都レッドデータリストに記載される動植物も多く生息している。特に重要なのは山地と接する谷奥に、年間を通して水の枯れない水たまりが多く存在することで、トウキョウウサンショウウオ（東京都



写真1 横沢入里山保全地域

掲載赤色立体地図のカラー画像をたましん地域文化財団デジタルアーカイブで公開しています。

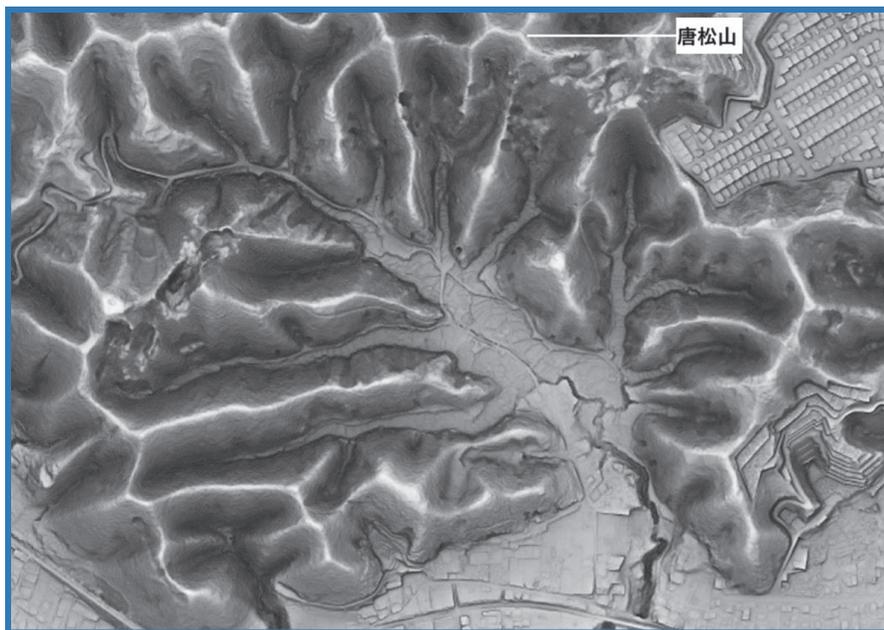


図1 あきる野市横沢入の伊奈石採掘遺構（東京都デジタルツイン実現プロジェクト 多摩地域点群データ微地形表現地図（赤色立体地図）（0.25m）より）

本土部絶滅危惧ⅠB類）の産卵場や、常に水辺近くに棲むアカハライモリやニホンアカガエル（いずれも絶滅危惧ⅠB類）の生息環境となっている。多摩の丘陵地における横沢入の重要性は、こうした湿性環境が豊かに存在する点にあるが、それらの維持管理はボランティアの活動に委ねられており、今後ボランティアの世代交代が進むかどうか、将来における最大の懸案である。

地形に反映する地層の褶曲しゅうきょく

さて、赤色立体地図の登場により、従来の地形図では十分に認識することができなかった微妙な地形の変化が、手に取るようにわかるようになった。本稿では、横沢入の山中に分布する伊奈石採石遺構と、特に採石に伴う人工的な古道をとり上げたと思うが、その前にまず、五日市丘陵全体について述べる。

五日市盆地と日の出町の平井川中流域には、東京都で唯一、新第三紀中新世中期の海成層が分布する。これを「五日市町層群」と言うが、本来は

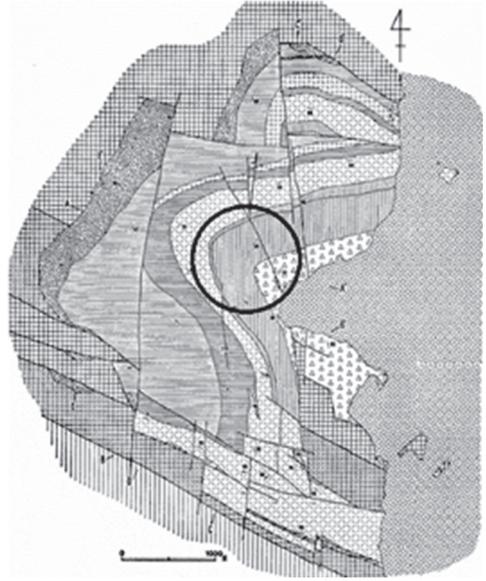


図2 五日市町層群の地質図・○は横沢入の位置
(注1の資料の挿図に加筆)

水平に堆積した地層が、後の地殻変動により、場所によっては垂直に近いほど傾斜し、全体として「C」の字を描いて褶曲している(図2)。五日市丘陵は、その「C」の字の左肩に位置する。つまり、南北に走る地層と、東西に延びる地層の接点が、ちょうどこの地域にあたる。五日市町層群のうち、高尾凝灰岩部層と伊奈砂岩部層は特に硬く、侵食に対する抵抗力が強い。①。こうして、両部層の分布域だけは平地にならず丘陵として残った。それが五日市丘陵である。

伊奈石の採石遺構

五日市町層群中の凝灰質で粗粒な砂岩(伊奈砂岩部層)は、一四世紀の後半から一九世紀前半までの約五〇〇年間にわたって盛んに採石され、墓石、石塔、石白などに加工された。②

赤色立体地図(図1)を見てまず目につくのは、画面右上の日の出団地の擁壁の西から、画面左端中央やや下にかけて、弧を描いて分布する採石遺構である。

伊奈砂岩部層は高角度に傾斜し、七〇から一〇〇°の幅で地表に露出する。傾斜の方向は、北側で南落ち、西側で東落ち(後述する「石山池」の中の岩盤で五〇度)である。つまり、図1で言うと右下(東南)の開口部に向かって傾斜していることになる。画面右上の唐松山周辺では南下がりの傾斜だから、南側山腹上部に広く岩脈が露出することになり、大規模に遺構が展開する。

画面左の天竺山の東側では、東側に延びる二本の尾根に斜めに交差して地層が分布する。石は地表に近いほど風化が進んでおり、石工は、風化の少ない良質な

石を求めて下へ下へ、地下に向かって掘っていくことになるから、結果、二本の尾根は採石によって断ち切られ、長さ二五〇^トにも及ぶ人工的な谷ができています。この二か所が大規模な遺構だが、両者の間を東西につき、弧を描いて分布する岩脈は南北方向の支尾根を横切っており、支尾根と岩脈が接した部分には、尾根の両側または片側に露頭掘りした跡が見られる。

唐松山東方の遺構群

唐松山東方の三〇五^トピークの直下には約六〇^ト×五〇^トの^{なま}堅坑跡がある。堅坑とは、地下に向かって掘ったことでできたすり鉢状遺構のことで、ここでは、すり鉢の底と尾根との比高は一^ト二^トある。堅坑の南側に不自然な平面が階段状に数段認められるが、これらは採石によって出たクズ石を積んで人工的に造成したもので「テラス」と呼んでいる。石は、加工すればするほど重量が減って搬出しやすくなるから、ある程度の加工は現地で行った。

テラスは、主にこうした現地加工のために造られたと考えており、実際、テラスには矢穴（石を割るため

の、鉄製のクサビ「矢」を入れるために彫られた穴。写真2）の残るクズ石や未完成品（加工途中で失敗した未完成品）が放置されていることが多い。山頂直下の堅坑の西側にも幅約六〇^トの堅坑があり、両方を合わせる主稜線の南側約二〇〇^トにわたって遺構が展開する。



写真2 矢穴の残る石

これらの遺構から得られた石材を搬出したルートだが、赤色立体地図によっても尾根道以外の古道が認められないことから、東の日の出団地側に降ろしたのではないかと考えている。さて、このあたりは「唐松城」なのだ

そうであり、「物見山」の名も伝わっている。田中祥彦氏は「現在は伊那石採掘のためにかなり破壊されており、旧状を知ることには困難である。しかし山頂部の主郭部や周辺に曲輪とみなすことができる削平地があり、(中略)たとえば平井館の詰め城ではなかったかと思われる」と書いている。³「削平地」は、あきらかに私が現地加工のためのテラスと認識した階段状平地のことを指している。なお、引用文中の「平井館」は、日の出町平井中野の宗劔寺跡が想定されている。

天竺山東尾根遺構群

画面左端の天竺山山頂(三一〇[㊦]・図3A)から画面中央に延びる天竺山東尾根は、本来はつながっていたものが、尾根に交差する岩脈を地下に向かって掘り続けたことで断ち切られ、人工的な谷となっていることは前に述べた。これを「天竺山東尾根遺構群」と呼んでいる。

これらは、大きく三つに分けて把握することができる。一つは山頂南側に残る幅約三五[㊦]と幅約三〇[㊦]の二つの露頭掘り(谷側から山腹に向かって掘り進め、

奥壁ができる掘り方)跡である。二つの坑を分ける仕切り部分には、数段のテラスが認められる(図3B)。山頂と南の削平地との間には伊奈石の長い石段があり、かどが摩滅していて歩きにくいのが、石段の石材はすぐ脇のこの坑跡から採ったに違いない。摩滅した伊奈石製石段の存在は、天竺山山頂が、採石当時から三内神社奥宮であったことの傍証ともなっていて貴重である。

二つ目は山頂の東に見える幅約五〇[㊦]、長さ約九〇[㊦]に及ぶ巨大な豎坑(地下に向かって掘った跡)である(図3C)。図を見ると、豎坑の中にさらに深く掘った部分のあることがわかるが、底には水が溜まっており「石山池」と呼んでいる。この池は、横沢入の南に位置する古刹・大悲願寺の第二四代住職如環(にょかん)が延享三年(一七四六)に描いた「東武多麻郡上秋留郷之内横澤村圖」にも「石山ノ池」として描かれており、天竺山東尾根が当時「石山」と呼ばれていたことや、江戸中期の時点ですでにほぼ掘りつくされていたことがわかる。

石山池の南北には、それぞれ数枚のテラスが築かれ

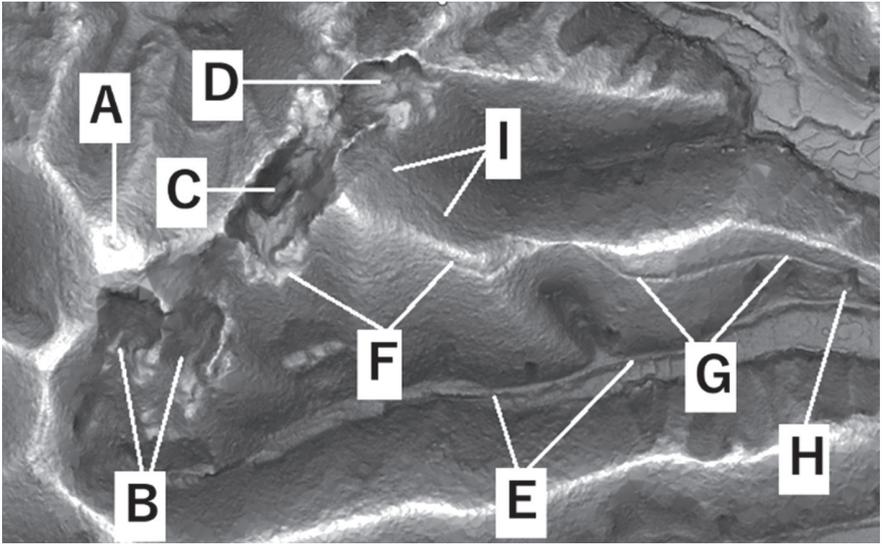


図3 天竺山東尾根遺構群 A = 天竺山山頂 B = 山頂南側の露頭掘り跡 C = 石山池豎坑 D = 釜ノ沢上部豎坑 E = 富田の入りの谷道 F = 南側山腹の搬出路上部 G = 南側山腹の搬出路下部 H = 壕跡 I = 北側山腹の搬出路



写真3 テラスを支える石垣

ており、いくつかは谷側に石垣を伴う（写真3）。そうしたテラスのうち一枚に「山神社」の三文字が彫られた石碑が立てられており、操業当時に石工たちが作業の安全を願って安置したものと認識している。石碑は、たまたま碑にしやすい平滑面が得られた三角柱状のクズ石をそのまま利用しており、紀年銘などは無

い。

遺構群の北東端は釜ノ沢最上部の巨大な竪坑である。北側に幅六〇呎に及ぶ崖ができています(図3D)。

石材搬出路遺構

石材を搬出したルートに注目したい。まず、山頂南側の二つの露頭掘り坑跡から得られた石材は谷底の「富田の入り」の谷道を運び出された(図3E)。この道は異様に広いが、これは、昭和戦前・戦後の一時期に、採石によって出た膨大な量のクズ石を建材として利用するため、トラックで運び出す際に拡幅されたせいである。

東尾根竪坑のうち、石山池より南側から得られた石材は南側山腹斜面に人工的に造られた搬出路から降ろされた(図3FG)。この道は途中、尾根道と出会うが、尾根道には再び登りがあるために、これより下部にも搬出路が延長され、下の一方に造られている(図3G)。現在、ほとんどのハイカーは、搬出路下部は歩かず、尾根道を下っている。これは、搬出路が出口に近いところで壕によって切られ、道が消失するから

である(図3H)。この壕は一九四四(昭和一九)年から一九四五年にかけて、本土決戦に備えて、敵の目から飛行機部品などを隠す目的で陸軍が築いたもの一つで、横沢入域内では、同様なものが二七か所認められている⁵⁾。図3Hのような壕は、赤色立体地図(図1)を詳細に見ると、主に南向き山麓に見える小さな矩形の影として認識できるから、興味のある方は探してみてほしい。

石山池竪坑は、よく見ると南側は崖状に区切られている。ここには、もともとは石垣があったらしく、崖の直下には崩れた石垣材と思われる人の頭大のクズ石が累積している。これに対し、北にはこうした区切りが無く、スロープ状に北側のテラス群とつながる。このことから、石材は北側に搬出されたことがわかる。また、釜ノ沢上部の竪坑からも、北側山腹経由で降ろすしかなかった。赤色立体地図は、かすかにだが北側山腹にあった搬出路を映し出している(図3I)。私はこの道を辿ってみたことがあるが、荒れ果てていままともに歩けたものではなかった。採石が終わって以降、この道を歩いた者はほとんどいないのだろう。

終わりに

石材の採石は前代の採石遺構を破壊しながら継続される。ある時代に採石が終焉したとしても、住宅などができて遺構が消えてしまわない保証は無い。図1右上の日の出団地がその良い例だし、実際、横沢入にも一九八九年から二〇〇〇年までの間、J R東日本による住宅開発計画があった。そう考えると、伊奈石採石遺構が、付随する搬出路遺構や周囲の環境とともに一体として保存されたことは一つの奇跡である。ぜひ、遺構を観察しながらハイキングを楽しんでほしい。

【注】

(1) 部層名は五日市盆地団体研究グループ「五日市盆地の新第三系」(『地球科学』三五巻四号、地学団体研究会、一九八一年七月) によった。

(2) 採石の開始期は五輪塔や宝篋印塔に遺る紀年銘の古いものから、横沢入の石山における終焉期は『大悲願寺日記(下)』(五日市町郷土館、一九九四年一〇月) 四二ページ「解題・石山一件」などから推定した。

(3) 田中祥彦「物見山(唐松城)」(『多摩丘陵の古城址』有峰書店新社、一九九三年六月) 二二八ページ。

(4) 溝口重郎「昭和の伊奈石の採掘について(再訂版)」(一九九三年九月) 二ページ

(5) 伊奈石の会「横沢入の戦争遺跡調査報告」(『伊奈石の会会誌第4号別冊』二〇〇〇年一月) 五ページ

【主要参考文献】

伊奈石研究会「伊奈石―伊奈石の採石・加工と多摩川流域の流通についての研究」一九九六年九月

伊奈石の会「横沢入の歴史遺産を歩く―伊奈石の石切場と石仏」
揺籃社ブックレット7、二〇〇九年一月



うちやま たかお

NPO法人横沢入里山管理市民協議会理事

伊奈石の会代表

あきる野市在住